

敗荷集 : 新體詩 : 文苑

著者	錨山人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 6
ページ	7 8 - 8 1
発行年	1899-12-23
その他の言語のタイトル	敗荷集 : 新体詩 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5464

たゝなはる夕雲の下にかけさえて波遙かなり筑前の山
我もまたあまとしなりてちどりなくまはのひかたに貝ひろはゝや
船のはの遙に見えて沖の風さはひめの松にふき渡る哉

○

秋ふくる庭のかきねの朝かはのつるのみになりて花の小さき
尼寺の小さき庭に茶の花のおとなく落ちて秋の雨ふる
虫となりて思の限りなきたりと見えゆめはさめぬあかつきの風

新體詩

敗荷集

錨山人

岸の若草色ふかみ、
ひあまの夢の跡逐ひて、
はるけき空の新星に、
春の心をかたりゆく、
背戸の小川はさらさらと、

煙に暮るゝ柳かけ、
里の童の駒どめて、
水かひ行きまゝそのあどは、
人げも絶えまゝこの岸に
なほも去りえぬ老嫗あり。

夕べの風の聲はなく、

白かねなせる鬢髪ふけば、
らうたき岸のわか櫻、
花さへ散りて、枯木なす、
老嫗のかひな拂ひつゝ。

水し汲まひと、さてはかく、
手桶たづさへ、出で來しを、
暮るゝもしらで、岸のべを、
立ち去りかねて迷へるは、
何に心のひかれてか。

梢の花の盛りをも、
水際の草のみどりをも、
ひとつ心にさそひゆく、
流れの水のとこまへに、
あゝ、還らぬを恨むらむ。

されど、老嫗、よもしも、汝が、
經りゆく年の悲しさに、
昔の岸に、今日立ちて、
若き戀路の嬉まさを、

思ふと、人の思ひなば、
耻づかまからずやいかばかり。

丹生の古城

『丹生城』は、丹生島にありたるを以て名く。又の名を「龜城」といふ。形の似たるを以てなり。白杵八島の一にして、其要害は、九州第一なりと云ふ。曠昔は即ち、大友宗麟の據りて、以て蜀を鎮西に唱へたる所、徳川氏時代に至りて、稻葉氏世々之を領しき。眺望また絶佳。

いとけなき折ゐるり邊の、
おぼちが膝にいだかれて、

高きはまれの武士を、

むかま語りにかかれし、
丹生の大城はあゝこゝに。

此所にといへど、其城は、
過ぎにし夢となり果てゝ、
松のみどりも年ふれば、
今は昔の影もなま。

朝日に、匂ふ緋威の、
色もやさまき若武者が、

玉ある劍ぬきかぎを
敵に名乗りをまづ擧げし
城樓はこゝと聞きつるを

雨ど風どに百年の
苔のみ滋げくなりゆけば
残れる趾の石壘に
罵こそひとりほこりがに

月明かき夜は花蔭に
小琴の音さへ匂ひつゝ
長夜の宴に手弱女が
舞の袖さへ輕るかりそ
その高臺を探ぬれど

今は空まき八重葎
をどろの草のいや生いて
葉末にすだくこほるぎは
何をか露にかこつらむ

嗚呼海原の大浪よ

青き潮よどこへに
壘根めぐりて爾は寄るも
人なき趾をうらみては
空まき退くか入る月に

あゝ岩の端に咲き出で
恨もふかき和田津海の
波にうつれる花萩よ
いざ語らずや過去し世を

空ゆく雲に行く水に
とこる定めぬ旅の身も
めぐりめぐりて丹生の城
けふか尋ぬと待ちけるを

夕べの風に露落つる
稻葉の川に裾もぬれ
はるぐ訪へばあゝあはれ
何をうれしき眺めそも

流浪ふ身には友もなく

胸の思ひの悲しさを、
慰むすべもあざれば、
涙も今は盡きけむを、

朽ちし丸木の橋の上、
さくも淋しき秋風に、
経るゆく世をば忍びては、
なほぬれまざる袂かな。

嗟、吁、せめて一夜を、此所に、寝て、
沈む夕日に色あかさ、
入江の浪に浮びなば、

往時の夢をたづね、
鴈の影もあるらむを、

今夕はいそぐ旅の身の、
根みは長き磯づたひ、
下の江わたりはるくど、
濱べの砂をふみゆけば、

夕ぐれつぐる鐘の音に、
丹生の海原秋ふけて、
小島の上に色あさき、
星のみ若く見えるかな。

漢文

壽三嶋中洲先生七十序

山田 濟齋

明治己亥我師中洲三島先生躋七十壽域。六月十八日門弟子相謀、侑壽觴于東台。準竊謂天下壽者、何限惟在先生、則不可無言。從遊之士、以千數。惟於準則尤不能無言。準幼喪怙、學資不給。先生垂憐、置之門下、教養兼至。準之略知文字、辨道義、皆先生之賜也。先生壽